

2019年度 いちいの杜 施設目標

スローガン ”介護老人保健施設の理念にのっとり、

利用者の在宅療養を担う役割を果たす”

- 1 施設内の連携を密にする
- 2 フロアのケアマネージャーを中心にしてケアプランを実践する
- 3 R-4システムを活用して業務の効率化を高める
- 4 人材育成に全職員が協力する

巻頭言

理事長 金光 弘

スーパー老健として再スタートして3年目を迎える。この間の介護施設の環境の変化には目まぐるしいものがあり、特に若い介護士達には訳の分からないままに事が進んでしまい戸惑いの声が聞かれている。ここにきて看護と介護の一体化が何を意味するのかがやっと理解し始めた様だが、介護施設が救急病院と化して日々追われながらの業務となってしまった。介護本来の利用者一人一人に寄り添いながら療養の手助けをしていく事が出来なくなってしまったのである。入所期間も3ヶ月と短く、その間に利用者とのコミュニケーションを確立していかなければならなくなり、行き届いた介護が出来ずに思い悩む介護士を見ていると、何ともやりきれない思いがしている。今や現状のスーパー老健としての使命を果たして行かねばならず、ジレンマに陥っている。

2025年までの5年間は石にかじりついてでも現状を維持していかなければならず、看介護、リハビリが一体となって日々の業務を是非とも確立し、利用者本位の老介護に従事して欲しいと思っている。在宅復帰事業は事のほか意義あるもので、在宅に戻った利用者の笑顔は何にも変えられない達成感と充実感を与えてくれるものなのである。一人一人の看介護では大変な仕事になってしまうが皆で手を合わせて行なっていけば、これ程楽しい仕事は無いと思う。スーパー老健としての責任を全うし有意義な職場を作り上げて行って欲しい。

目標を立てることの意味

施設長 浜田 篤

新年あけましておめでとうございます。「一年の計は元旦にあり」とは昔からよく言われています。また目標もライフワークとして追求するような大きなものから、その時々で「何時までにこれをやろう」と思うことまで、様々なものがあります。

では何故、目標を立てるのでしょうか。それは目標を実現するためです。現状では達成されていない状況を望む状況に変えていくためには、実現に向けた行動を起こすことが第一歩です。その「行動の方向性」を定めるために、目標を立てるのです。

そしてもう一つ、目標を実現するために大切なことは、「行動を継続」することです。継続するためには、目標に向かって「進んでいこうという意思」を持ち続けることが(初期段階では)必要です。意志を持ち続けて行動が習慣化した後は、自動的に目標達成に近づいていきます。行動が習慣化するまで意思が持続するように立てる目標は「何が何でも実現したい」と強く願うような目標を立てましょう。

頑張ろう！多職種連携

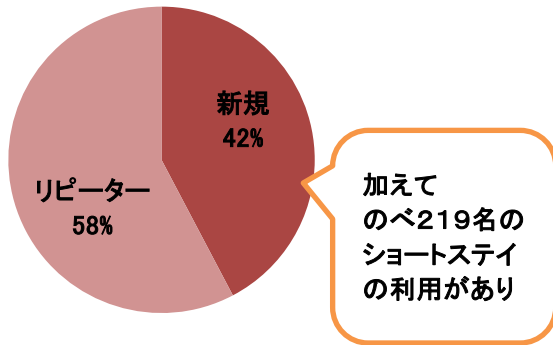
理事 飯塚 和子

明けましておめでとうございます。年末年始の長い休暇中の勤務、大変お疲れ様でした。1月13日、洪川の空は雲ひとつない青空で、朝早くから自治会毎に、どんどん焼きの白い煙があちこちから立ち昇り、パチパチと竹の焼ける音と子供達の明るい声が出て、穏やかな成人の日の風景でした。昨年は自然災害が相次ぎ、各地で大きな被害がありました。今年はこんな穏やかな日でありますように、願わずにはいません。

いちいの杜は『超在宅強化型老健』に手を挙げて2年が経とうとしています。老健のあり方は変化してきておりその動向に常に敏感であらねばならず、見直しや工夫が必要になってきます。入退所が多く急がしさは相変わらずですが、各職種が一同に会し、同じ問題に向かって知恵を出し合っている姿は心強く思います。多職種共営は老健の強み。多職種間の良好な『連携』『チームワーク』がキーワードになります。スーパー老健として歩き出した以上、職員一同しっかり前を向いて歩いて行こうではありませんか。結果はついて来ると思います。

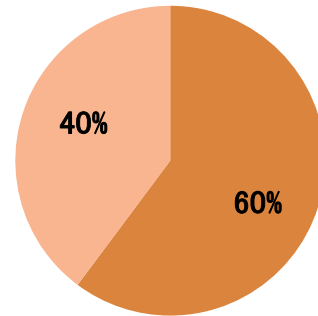
平成31年1月から令和1年12月までの実績報告

入所者 201名

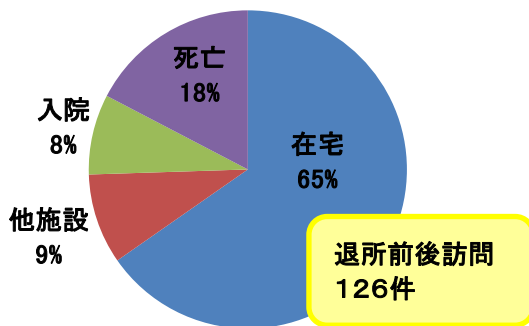


入所前機関

■ うち居宅 ■ うち医療機関

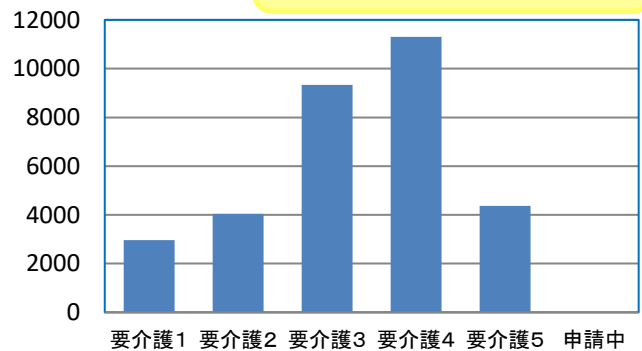


退所者 196名

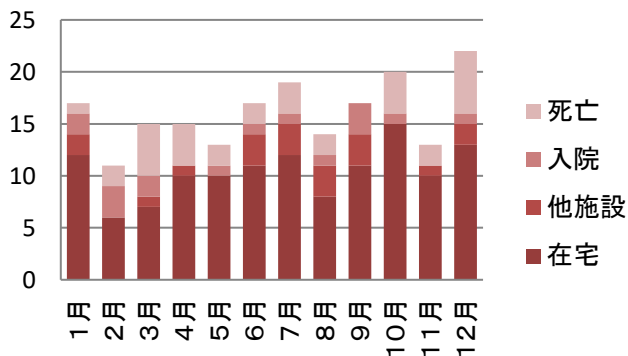


要介護度

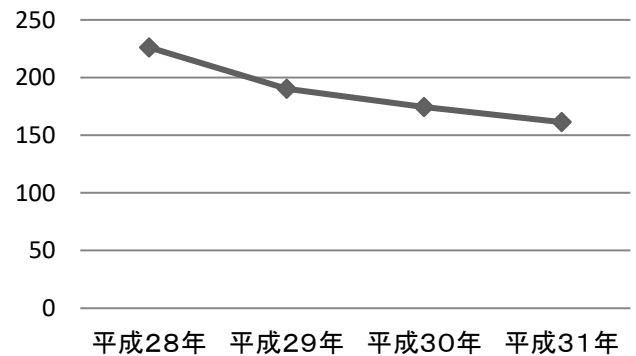
平均要介護度: 入所:3.3
ショートステイ:3.6



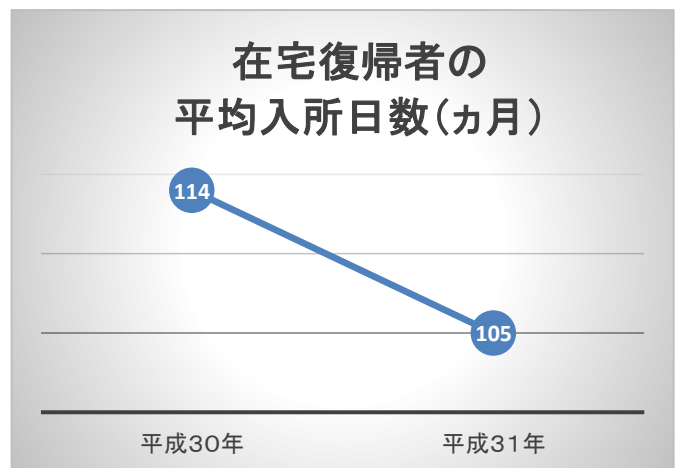
退所者内訳 (月別)



平均在所日数



在宅復帰者の平均入所日数(カ月)



平成31年1月から令和2年12月までの実績を報告させていただきます。特徴としては、年々在宅復帰率が上がり、平均在所日数のこの4年間で226日から161日と約2か月減少しています。令和2年4月の介護報酬改定で要介護1、2の長期入所がますます厳しくなるのではないかとされており、今後の動向をみているところです。

新年のご挨拶



看護部部长 佐藤 幸恵

新年明けましておめでとうございます。いちいの杜では年末から年始にかけてインフルエンザの利用者様がおり、居室を移動したり食事介助者が増えたりしていました。休日勤務の中でも各フロア間で連絡を取り、お互いに業務を補い合うことで混沌とした状況乗り越えることができました。これからも超強化型老健としてのいちいの杜は入退所もさらに増えていくと考えます。本年も忙しさに振り回されぬよう、それぞれの部署同士で情報の共有を密にし、計画性を持ちながらきちんと連携を図っていきたいと思います。在宅に戻り、デイケアでお会いする利用者様はとてキラキラした顔をしています。「家に帰りたい！」という利用者様の思いをしっかり受け止め、業務の効率化を高めてやりがいのある職場作りをしていきたいと思っています。



介護部部长 原 彰宏

皆様、あけましておめでとうございます。

介護部はスタッフの入れ替わりもあり、在宅超強化型老健でのキャリアが初めての方や、いちいの杜で介護キャリアをスタートする方が年々増えてきています。開設当初から一貫して在宅復帰を目標にし、それを支える介護部は社内教育に力を入れ、介護力の底上げをしてきました。その結果、いちいの杜で介護キャリアをスタートした方が、経験を積んで、国家資格である介護福祉士を取得する事例が増えています。しかし、知識と技術は身についても経験値だけは教育だけではどうにもなりません。日々めまぐるしく変わる利用者の状況、現場の状況を把握し、スタッフ間で情報の発信、収集、共有を行って行かなければチームケアは出来ません。介護部の今年度の課題はこれを強化する事としました。役職者や段位取得者を中心に、経験値を皆でカバー出来るように声を掛け合いながら進めて行きたいと思っています。又、各専門職と情報交換を行い、共有することで正しい知識、ケア方法を確認し、統一したケアを行い「ONETEAM」になれるよう精一杯やっていきたいと思っています。

至らない点ばかりではございますが、本年もご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します。



相談部部长 白田 悦子

明けまして、おめでとうございます。

この3月で在宅強化型老健から超在宅強化型老健に移行して丸2年が経とうとしています。この1年間も約8割の利用者が在宅復帰を果たしています。入院に伴い廃用を招き、医療機関でリハビリを受けても到達できず、「本当に帰れるのだろうか」と不安な思いを抱えながら入所してくる多くの入所者やご家族が、退所の日を迎えられる。そこに関わらせて頂けることに日々感謝しながら、令和2年も精進してまいりたいと思います。



栄養部部长 高木 美樹

新年あけましておめでとうございます。

昨年、嗜好調査を実施した際、皆様より「食事の時間が楽しみなんですよ」と声を掛けられることが多く、食事の重要性を改めて感じております。日々、食事時にラウンドを実施し、食事面について他部署と情報交換を行っております。各々の状態に合わせて適宜食事内容を見直し、食べやすい状態に変更するなどして、安全にしっかりと食事摂取できるよう体制を整えています。本年も、色々な食事のイベントを設けて食に関心を持ってもらいながら、利用者の皆様が安全に美味しく食事が出来て在宅復帰に繋がられるよう、創意工夫に励んで参ります。よろしくお願い致します。

新年のご挨拶



リハビリテーション部部长
兼 通所リハビリテーションセンター長
徳岡 美鈴

新年あけましておめでとうございます。2020年の干支「庚子」は、非常に冷静なひらめきとクレバーな行動で転身し、新しく始めることがとてもうまくいくことを意味しているそうです。リハビリテーション部は少々体制を変えて、引き続き他部署との情報を共有し、チームとして仕事に当たり、超強化型老健での役割を務めていきたいと考えています。その中でとくに、経験の浅いスタッフがしっかり働けるよう育てていくことに取り組んでいきます。また、デイケアは今年から新しいノートの使用を始めています。利用者と在宅生活を支える情報が読み取りやすく、リハビリについては、見ていて楽しく、次がんばりたくなるような内容にしています。ご意見があればお知らせください。リハビリテーション部OneTeamでがんばりますので今年もどうぞよろしく願いいたします。



リトミック
萩原 真美

いつもリトミックにご理解とご協力ありがとうございます。皆様を支えられて、今年の4月でいちいのリトミックは7年目を迎えます。これまで出産や家庭の事業などで退職したメンバーもいましたが、このリトミックを始めたばかりの時から変わらない仲間と、さらに素晴らしい技術や才能を持った仲間が加わり、今、皆様に喜んで頂けるいちいのリトミックになりました。これからも皆さんの心や体の痛みや苦しみが歌うことや、歌を聴くこと、話をする事で少しでも和らいだりすることができたらと思います。皆様の心に寄り添い、心を込めて、今年もリトミックを続けていきます。本年もどうぞよろしく願いいたします。

いちいの杜 段位制度



この度、2階介護士 森原 英 がいちいの杜段位制度初段を取得致しました。今後はプリセプターとして業務を行い、より一層の活躍を期待しています。下記にて論文を掲載させていただきます。

「超在宅強化型老健の介護福祉士としての役割」



「いちいの杜」は超在宅強化型老健となった現在、さらに期待されるのは「在宅復帰」「在宅療養支援」のための地域拠点となる質の高い施設である事。病気や認知症によって要介助者になってもできるだけ可能な限り住み慣れた地域で、「自分らしい暮らしを人生の最期まで続ける」ことができるよう支援してくれる施設である事が「人生の最期まで」とその言葉通りの重要な役割を担っているのではないかと考える。そのため、在宅復帰を目指すためには他職種との関わりが重要で利用者がサービスを最大限に利用できるよう、様々な情報が円滑にまわるように介護福祉士はその役割を旗なさなければならない。この「いちいの杜」においても医師、看護師、薬剤師、理学療法士、作業療法士、生活相談員、管理栄養士などの職に就いているエキスパートがいるが、利用者へのケア項目の関わりが1番多いのは介護福祉士といえる。最も近い存在として、身体状況・生活状況・環境の変化をいち早くつかみ、必要な情報をチームに伝える。利用者や家族の思い、支援に対する意向をチームに代弁するなど現場で得られた情報をチーム内で共有するパイプ役としての役割を担っている。そして、在宅復帰を繰り返した結果として看取りがあることも頭に入れ、介護福祉士として力を尽くしていく必要がある。

老健施設として、これからの超高齢社会により、更に多くの死を迎えることになり、看取りは避けては通れない部分である。在宅復帰を繰り返す過程での看取りだけでなく、病院や在宅から入所の段階で看取りを前提とした入所を希望する方も増えてくることと思われる。過剰な医療処置を施さずに、静かに穏やかに迎える最期は、施設で馴染みのスタッフからのQOLに配慮した温かいケアを受け、家族に見守られるなかでの臨終を迎える。そうして、家族とともに自宅へ帰る。これも施設からの立派な在宅復帰になるのではないかと考える。まずは、利用者にとっての馴染みの施設と感じられ安心できる場所作りと超在宅強化型の介護福祉士としての役割を今一度じっくりと考え、他職種のチームの一員として私のできる事をしっかりやっていきたい。

「段位を取得して」

2階認知症専門棟で7年間勤務する中、研修で専門知識を学び技術を習得し現場では様々な専門職の仲間と共に働いて今の私があります。これから先も向上心を忘れずに挑戦し続け、ご利用者さんや仲間の力になれるよう、より一層質の高いケアを目指し業務に取り組んでいきたいと思っております。

医療法人社団弘樹会
介護老人保健施設 いちいの杜

住所 東京都昭島市武蔵野3-5-63
TEL/FAX 042-500-0151/042-500-1533
ホームページ <http://www.kanemitsu-c.or.jp/>
Email ichiinomori@nifty.com